

American Rock Lyric Landscape

—アメリカン・ロック・リリック・ランドスケープ—

ロックの歌詞から見えてくるアメリカの風景

文=ジヨージ・カックル

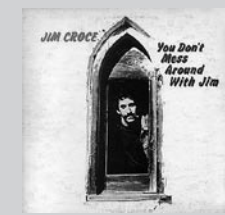
イラストレーション=花井祐介

第8回

プール・バーから見たアメリカン・カルチャー

Jim Croce

'You Don't Mess Around With Jim'



Jim Croce
"You Don't Mess Around With Jim"
ABC 756 [1972]

ビリヤード場のようにテーブルを1時間借りるケースは少なく、1回ずつコインを置いて、飲みながら、音楽を聞きながら楽しむものだ。ビリヤードをやりたい人はテーブルのレール・クッションの下にコインを置いて順番を待つ。俺が若い頃はワン・ゲーム75セントだった。でも並べるのは25セント・コイン1枚でいい。それがアメリカのルールだ。そしてどの街に行ってもハスラーがいる。ビリヤードで賭けて生活をしているんだ。ちなみに、アメリカではビリヤードと言わず、プールというんだが。

音楽は生まれた国の文化がにじみでている。だからアメリカの曲を知ることには、少なからずアメリカを知ることになる。今回もそんな文化や日常を垣間見ることができ、曲をピックアップした。ビリヤードの世界を舞台に、架空の人物、ビック・ジム・ウォーカーというハスラーが死ぬ話だ。この曲を書いたジム・クロウチは、ワーキング・クラスの男を主人公に仕立て、ストー

リーを描くことが多かった。この曲は1972年に発表したアルバムに入っており、翠年に出したアルバムは大ヒットした。しかしそんな人生のピーク時に、彼は飛行機事故で亡くなった。ツイていないといえはそれまでだが、この曲はそんな彼のメッセージのひとつなのではないだろうか。ビリヤードは、ほとんどのアメリカ人にとって、飲みながら楽しむ遊びだ。日本の

Uptown got it's hustlers
The bowery got it's bums
42nd Street got Big Jim Walker
He's a pool-shootin' son of a gun
Yeah, he big and dumb as a man
can come
But he stronger than a country hoss
And when the bad folks all get
together at night
You know they all call Big Jim "Boss",
just because
And they say

歌のなかで、アップタウンにはハスラーがいるという。ハスラーはビリヤードで儲ける人を指すが、人をだまして金儲けする人のこともそう呼ぶ。ニューヨークの港のそばの倉庫街パワリーは、今でこそおしゃれになっているが、この曲ができた70年代はホームレスが山ほどいる危ない場所だった。ハスラーのビック・ジム・ウォーカーがいる42番街は、ストリップ劇場が軒を連ねていたところだ。詩のなかに「pool-shootin' son of a gun」とあるが、プール・シューティンとはビリヤードをやる人のこと、サン・オブ・ア・ガンは愛情を込めながら悪い奴のことを呼ぶときに使う言葉だから、これは当然、ビック・ジムを指している。そして大きくて、これほどバカな男はいない、しかし彼は地方で働く馬と同じくらい強い(一)と言う。悪い奴らが夜集まると、みんな彼をボスと呼ぶ。

You don't tug on Superman's cape
You don't spit into the wind
You don't pull the mask off that old
Lone Ranger

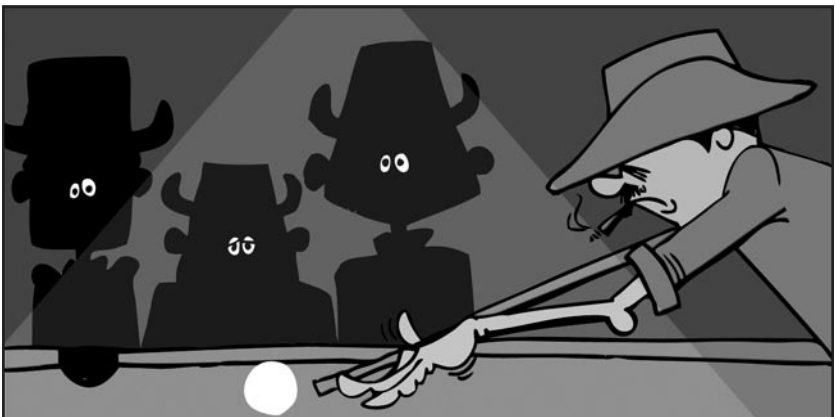
And you don't mess around with Jim
サビではいろんな譬えを使って、みんながジムとは絡むなという。スーパーマンのマントは引っぱらない、風に向いてツバは吐けない、ローン・レンジャーのマスクは取らない。これは基本だ。ところで、これは個人的な思い出だが、75年のある冬のこと。俺は彼女とサン・アントニオの郊外の飲み屋にビリヤードをしに行った。入ったのはテキサスによくあるカウボーイ・バー。男も女もみんなカウボーイ・ブーツとカウボーイ・ハット。テキサスのカウボーイはたくましい。そして女性はスリムで、まるでジェリル・クロウみたいだ。きつと馬を乗りこなせるんだらう。カントリー・バンドが演奏するなか、客は踊って飲んで、ビリヤードに興じる。アメリカのこういう店はライブをやっている日本と違い、大音量でなく、会話ができる程度の音だ。奥の部屋には5〜6台のビリヤード・テーブルがあった。そして俺は一番弱そうなたちのテーブルに行き、25セントを置いて順番を待った。勝った人は次のゲームがタダになる。ずっと勝ってこれ

ば永遠とタダだ。もちろん(一)俺が勝ったから、次は彼女とプレイする番。もう次には違う人がコインを置いて待っている。次々と対戦相手が出てくる。誰も金は賭けていない。そんなとき、どう見てもその店に似合わない服を着た男が入ってきた。男は何にも言わず、何にも飲まず、ただ壁に寄りかかってゲームを見ていた。そしてその男がいなくなった途端、急にテーブルのポケットに金が出てきた。どうやらあの男は刑事だったようだ。俺がやっているテーブルにも何冊かのドルがポケットに入れた。誰が勝つかみんな金を賭けているようだった。そして次の対戦相手のカウボーイが、急に5ドル賭けようかと言ってきた。きつと彼はハスラーに違いないと思い、俺は断った。俺はきつと負ける。

Well outta south Alabama came a
country boy
He say I'm lookin' for a man
named Jim
I am a pool-shootin' boy
My name Willie McCoy
But down home they call me Slim

Yeah I'm lookin' for the king of
42nd Street
He drivin' a drop top Cadillac
Last week he took all my money
And it may sound funny
But I come to get my money back
And everybody say Jack don't
you know

アラバマ州の南から来た男が、ハスラーのジムを探しに来た。男の名はウィリー・マコイ。背が高く細いせいで、地元ではスリムと呼ばれている。ウィリー・マコイという名前は、アメリカではよくある名前だ。そのウィリーは言う。俺は42番街のキング、ビック・ジムを探しにきた。奴はオーブンのキャデラックに乗っている。ウィリーはジムにだまされて負けた時の金を取り返しに来たんだ。しかし、そこでお客はウィリーに言う。おおいおまえ、自分が何を言っているのかわからないのか？と。ジャックと声を掛けているが、別に相手の名前はジャックでなくてもいい。話しかけるときによく使う名前なんだ。では、プール・バーでの思い出話に戻る



う。俺はハスラーと思われる男の申し出を断ったが、ハンデをあげると言われ、つい受けてしまった。するとなんと俺が勝ったんだ。勝ち逃げもできずに、彼の再度の申し入れを受け、次も俺は勝った。彼は静かだったが、見るからに怒りに満ちていた。しかしゲームは止まらない。俺の勝ちゲームが何回も続いた。ついにハンデのないゲームで80ドルを賭け、俺はまたもや勝利。彼女の顔を見ると、すごく不安そうだった。その場から逃げたい、そんな表情だ。なにしろ彼女はヒッピー・ドレスのフラワー・チャイルド、俺は髪を腰まで伸ばしていた。周りはショート・ヘアのカウボーイばかりで対照的だ。殺気を感じた俺は断ってやめようとしたが、ダブル・オア・ナッシングという声が返ってきた。俺がまた勝てば、彼は俺に80ドルを2倍にして払う。もしも彼が勝ったら彼はそれまで損した分が消えるという。俺はどうせギャンブルで儲けた金だからなくなってもいいと思っていた。その場を離れられる雰囲気ではなかったし、やるしかなかった。そして信じられないことに、また勝ったんだ。160ドルだ。ちょっとヤバイ雰囲気だ。俺は帰ろうとした

が、周りのカウボーイたちがワン・モアと言い始め、もう一度ダブル・オア・ナッシング。勝てば320ドルになる。すると、またもや勝利の女神が微笑んだ。相手は寂しそうに財布を見ていた。どうみても320ドルはない。そこで俺が言った言葉は「Forget it」もういいよ、だった。すると部屋の空気が変わった。言っただけじゃない言葉だったんだ。俺は彼を侮辱してしまっ

た。俺は彼女の手を取って、二人で逃げ出した。車を走らせ高速に乗り、何キロか走ってから、一度降りて逆方向に向かった。そしてホッとした瞬間、俺たちは笑い出した。次の日、その160ドルで俺は初めて本物のカウボーイ・ハットを買ったんだ。

Well a hush fell over the pool room
Jimmy come hoppin' in off the street
And when the cuttin' were done
The only part that wasn't bloody
Was the soles of the big man's feet
Yeah he were cut in bout a hundred
places
And he were shot in a couple more
And you better believe

They sung a different kind of story
When Big Jim hit the floor now
they say

詩の説明に戻ろう。スリムが探している最中、突然ジムが呑気そうに部屋に入ってきた。喧嘩が終わったとき、血が付いていないのはジムの足の裏だけだった。ジムは100か所以上も切られていた上に、何か所も撃たれていた。ジムが倒れたときには、皆はなつきとは違うストーリーを歌っていた。違うのは、次の詩のことだ。

You don't tug on Superman's cape
You don't spit into the wind
You don't pull the mask off that old
Lone Ranger
And you don't mess around with Slim

前のサビとはほぼ同じだが、最後の一行のジムがスリムに変わっている。
Yeah, Big Jim got his hat
Find out where it's at
And it's not hushin' people strange

to you
Even if you do got a two-piece
custom-made pool cue

詩のなかでビッグ・ジムは帽子をもらったとあるが、これは決闘を挑んできたスリムにジムが負けたという意味だ。いくらハスラーだからといって、他人をだましていいわけではない。高価な2ピースのカスタム・キュー・スティックを持つていたって、痛い目に合うこともある。ここではビリヤードを例にとり、人生のルールを語っているんだ。実は俺も2ピースのカスタム・キュー・スティックを持つていたことがあった。あるとき、サンフランシスコの隣のブルーズ・バーで、知り合いがビールを賭けようと言ってきた。俺は当然勝つと思っていたが、彼はその店の壁に並ぶ曲がったポロポロのキュー・スティックを使って、俺をことん潰した。俺は一回も球に触れず、彼にビールをおごった。次の日、俺は恥ずかしくて、その2ピースのキュー・スティックをばらし、ケースに閉まった。そして二度と開けることなく、人にあげてしまった苦い経験があるんだ。